

第 25 号
1973, 1

書評

編集・発行
関西大学生協同組合
組織部
「書評」編集委員会

吹田市千里山東3-10-1
TEL 388-1121
内線 776

- 書評
- 3 「恍惚の人」(有吉佐和子著)
——人生最後の段階—— 竹内千代
- 6 金鶴泳断章
——在日朝鮮人とのこと—— 山園 勝
- 10 「ニッポン釜ヶ崎」(大谷民郎著)
——今日を充たす界限、
あるいは昨日の明日を生きた人々—— 当脇雅恵
-
- わたしの研究ノートから
- 13 日中文化関係史の一面 (Ⅶ) 増田 渉
- 16 ヘーゲル詣で (Ⅳ) 中埜 肇
-
- 2 ■ 巻頭言 ——実証すること—— 網干善教
- 19 ■ 編集後記

書籍購入グループを創設し
一括共同購入を推進しよう
書籍の生協一元化をかちとろう

題字は網干善教文学部助教授

カット写真は「アサヒカメラ」1972年10月号
ユージン・スミス「水俣」より

最近読んだ飛鳥高松塚古墳の壁画に関する見解のなかに卓越した理論をもって記述されているものに接した。しかしそれが如何に理路整然としたものであっても、事実の確認が不確実であったり、誤認であったりするならば、とんでもない結論になってしまふ恐れがある。またあまり推理を重ねて論理を引っぱっていくと、それは最早創作にしかすぎなくなり、理論の弄になってしまふこともあり得るだろう。そのこととは本人にとつて大変面白いことではあるかも知れないが、それに誘導される人があつたらやはり被害を与えたことになる。

梅原猛氏の「私見・高松塚」及び「続私見・高松塚」は大変愉快な論理のすすめ方であると思う。高松塚古墳に関する観察も、まさに「隠された十字架的」である。

梅原氏の四の謎は第一に被葬者の遺骨に頭蓋骨も下顎骨もない。第二に鏡、刀、玉が残っているが刀身がない。第三に玄武の頭は削りとりされている。第四に星夜に帝王を表わす北斗七星がない。以上である。人骨と鑑定した鳥五郎氏も頭蓋骨もないことを認めている。それだからとつて処刑された人でもないと思う。我々は度々人骨を発掘する。頭蓋骨、下顎骨も簡単に取上げることができる。後世の盗掘者が侵入した人でもないと。我々は度々人骨を発掘する。頭蓋骨、下顎骨はない。「刀身はなく金具だけあつた」といわれるが、副葬されてから長い年月を経過すると外装が腐蝕し、刀身を取上げれば、外装は外れることは容易に考えられる。事実そのようなことは絶えずある。盗掘者が刀身を引上げたとき外装の金具がそこに残つたとすれば別段不思議ではない。現に金具のうちで鏝は残っていない。それは刀身についているからである。玄武が削られているということも別段怨念の意味がない。それならば何故青竜や白虎を削らなかつたか。盗掘坑は南側にあけられた。光は南から入る。北の正面に玄武が描かれている。西側や東側は見えにくい。やはり直視的な恐怖心に起因すると考えればこれもまた当然のことであろう。

天帝王である北斗七星は描かれていないといわれるが、天極に天帝の星がある。北斗七星は帝王の星であるのだろうか。疑うことには意義がある。それがなければ真理の追求もなにもない。吉永登先生の「通説を疑う」という学問的態度はそのことを意味する。しかし梅原氏のようにすべてが「隠された十字架的」論理で、高松塚古墳を見ることに危惧を感じる。まだ「続私見・高松塚」は完結していないので結論が楽しみである。

水野祐氏の「古墳と婦人」も大変な論理である。高松塚古墳の規模を墓制令（一般に薄葬令と呼んでいる）の規定に對比させるのと石郭の広さ、長さともに官司の墳墓より小さい数値であるとして「被葬者は皇族でないことはもろんであり、貴族でもなく、下級官吏、もしくは地方豪族の墳墓とするのにふさわしい」と述べている。日月、四神、男女群像、星夜を描き、海獣葡萄鏡、銀装太刀を副葬しさらに金銅装透飾金具をつけた漆塗木棺に納められた被葬者を、ただ大化薄葬令に合致したいからという理由で下級官吏もしくは地方豪族と決断することはできるだろうか。またそのことがそう判断するのに足るものかどうかを考えられる必要がある。

私が一考古学学徒として常に感じるのは、一つの事象を実証することが如何に至難であるかということである。論理をすすめていく上で、絶えず実証できうる可能性を配慮しながら同時に他の可能性も考えてみなければならぬと思う。ただ興味本位にのみとらわれて徒に奔走することは厳に自戒しなければならぬ。私もまたそうであるかもしれない。

（文学部助教・網干善教）

巻頭言 実証すること

恍惚の人

有吉佐和子著

人生最後の段階

恍惚の人の周辺

竹内千代

人生周期—五段階

わが国の家族は、戦後、制度的にも理念的にも大きな変革を遂げた。これにもなつて、伝統的な「家」観念は否定され、これまで支配的であった親子を中心とする家族関係に代わつて、夫婦を中心とする家族関係が尊重されるようになってきた。このような変革の中にあつて、家庭内における老人の地位も動揺することを免れない。有吉佐和子さんの「恍惚の人」は、そのような老人をめぐる諸問題のある断面、老人と同居している家族がどのような構造をもち、どんな問題を抱えながら家族生活を営んでいるかを鮮やかに描いている。

長い人生を適当な区切りで切つて人生周期段階をつくるならば、五段階に区切

ることができる。本人の出生によつて独身前期が、その婚姻によつて夫婦前期が、長子の出生によつて親子同居期が、末子の結婚離家または死亡によつて夫婦後期が、配偶者の死亡により独身後期が、それぞれ始まる。しかし、これに対する異例は多い。独身で終始すれば二期（夫婦前期）、三期（親子同居期）、四期（夫婦後期）、五期（独身前期）がない。又結婚しても子がなければ三期が欠け、二期と四期が混合して五期へ移る。未婚の子が家に残れば、三期は延長して四期と混合する。夫の死後に妻が再婚すれば、妻の二期と三期と四期は重複する。

人生周期の時間的構造は、二子をもつ日本の婦人の場合、独身前期は〇才から一三才まで、夫婦前期は二四才から二六才まで、親子同居期は二七才から三三才

まで、夫婦後期は五四才から六三才まで、独身後期は六四才から七才までとなる。晩婚すれば一期は長くなり、多産すれば三期が長くなり、四期が短くなる。現在は、四期を長期化して生活を楽しもうとするアメリカの傾向が日本にも及んできている。

「恍惚の人」の茂造老人は、独身後期にはいっている。この期は、老人の体力も精神力もともに衰え、収入は減少する反面、病気その他の理由による支出は増大するので独立生活は困難になる。直系家族時代には一般に敬老精神が強く、老人は家族と同居できたが、核家族時代には老人は家族との同居を拒否される傾向にあり、独身後期の老人に対する社会保障制度の必要性が増大している。

たとえば「国連続計年鑑」によると、

日本の満六五歳以上の有業率は一九五八年において、男子はアメリカの約二倍、女子は約三倍の割合を示している。しかもわが国の老年者の有業率が高いのは、主として農業労働および雇用工をもたない自営業主およびその家族従業者によつて占められている。また雇用工の場合、常雇の例に較べて少ないとはいへ、臨時日雇労働の就労形態をとる非熟練労働への就業率も高い。失対や民間日雇労働に従事する人口が、満五〇才以上三六、六〇才以上二五%という割合からみても、老年者が不安定な職業に従事し、また小規模な事業所での就労を余儀なくされている実態を理解することができる。

戦前の直系家父長家族制度のもとでの親の扶養義務については「扶養ノ義務ハ、扶養ヲ受クベキ者ガ自己ノ資産又ハ勞務

ニヨリて生活ヲナスコト能ハサルキニ
ノミ存在ス」と規定して、夫婦の直系尊
屬とくに戸主と家族との間の扶養義務を
明らかにしている。戦後の改訂民法のう
えでも「親の扶養」の原則が根本的に変
ったわけではないが、扶養の順位、方法、
程度などに関して旧法の複雑な規定を整
理し、当事者の自主的立場を重んじ、扶
養義務者の範囲を狭めたのである。これ
はすべての子どもが平等だという原則に
立つて、親の財産を相続する権利が平等
である代り親を扶養する義務も平等に分
担するということである。ところが民法
のうえではこのように親の扶養について
は平等な義務が残されても、日本の社会
の現状ではどの子どもも、親を扶養でき
るだけの余裕のある生活をするのは容易
なことではない。資本主義の発達と都市
化の現象は資金労働者の家族を増加させ、
しかも核家族化を進行させている。資金
のなかには親の扶養手当は含まれていな
いので、親を扶養するとそれだけ家計は
圧迫される。それに加えて都市の住宅難
は老人の居室を準備することも困難であ
る。といつて別居すれば生活費の支給が
過重負担となる。その結果やむを得ず同
居しなかつたり、あるいは親は老齢から就労しなけれ
ばならなかつたり、若い者たちと生活面
の葛藤をひき起したり、あるいは別居し
て老後孤独に悩まされたり、種々の問題

をかもしたている例が少なくない。

茂造老人―独身後期

まず、独身後期においては、再婚の機
会は少ない。主親的には、故人追憶のた
めに再婚を欲しないし、年齢が困難で、適
当な配偶者候補が減少して人選が困難で
あり、肉体的には、すでに婚姻可能な状
態になり、ことが挙げられる。この傾向は
女子に強く現われる。昭和四〇年におけ
る五〇才から五九才までの死別離別のま
まの男女数の対比は一対六であるのに対
し、最近一〇年間における有配偶者の男
女数の対比は六対五であるから、男子側
の再婚が多いことを示している。

しかし恋愛の機会が多い。谷崎潤一郎
の「瘋癲老人日記」によると、次のよう
に、生きていく限り性欲的楽しみと食欲
の楽しみとは持ち続けることができる。

「子ガ我ナガラクキタナラシ（嘘）チ（嘘）チ（嘘）縮
デアルコトハ自分デモヨク知ツテイル
夜寝ル時ニ義齒ヲ外シテカヲ鏡ヲ見ルト
実ニ不思議ナ顔ヲラントイル。人間ハオホ
カ、猿ダツテコナ醜態ナ顔ハシテイナ
イ。コナ顔ヲ見ニ好カレヨウナリシテ馬
鹿ナソナ思フ所ヲバ、ソウナリ、全
クソナ資格ノナイ老イデアルコトヲ自
分ミズカヲ認メテイルニ違イナイト、
ソウ思フテ世間ガ安心シテイルトコロガ

附ケ目デアル。附ケ目ニ乗シテドウスル
ト云ウ資格モ力モナイケレドモ、安心
シテ美人ヲ傍ニ寄ルコトハ出来ル。」

茂造老人も、美人でグラマーなエミさ
んに真紅のサルビアを捧げている。隣の
婆さんも茂造老人には甲斐妻申し世話

をやいて、昭子さんをそつとさせて話を
「お婆ちゃんがああ齢でねえ。あなたがあ
色っぽいって言ってたの分ったわ。ねえ
立花さん、ねえ立花さんって、べたべた
言のよ。私、見ていてぞうとしてぎ
たわ。私もあんなになつたらどうしよう。」
と、概して成人の老いらくの恋に対する
評価は冷淡である。

独身後期には、主親的には心身機能に
対する自信を失い、客親的には心身の衰
弱が目立つてくる。健康度においては個
人差は著しいが、一般に肩腰の疲労を訴
え、罹病恐怖に陥つて、赤業を求め頻繁
に診察を受ける者が増加する。客親的に
は、半身不随、不治の病氣、慢性的な老
碌が、家族の生活に与える影響は大きい。
年をとつてから起る疾病は、大体、三
種類にわけることができる。第一に、老
人となつて生理的変化がおこることが直
接に原因となつて起る疾病、たとえば老
人性関節の病氣、動脈硬化、老人性痴呆
など。第二に、老衰とは直接関係なく、
老人を侵す疾病、たとえば高血圧、癌、
糖尿病、肥満病、痛風など。第三に年齢

を問わず、老人にも若い人にもみられる
疾病、たとえば肺炎、チフスなど。この
中でも特に死に至る主な疾病は、成人病
とよばれる脳卒中、癌、心臓病である。

また、老人においては、生理的老年性
変化の上に病的な変化が加わつたために、
青壮年者にはみられない種々の特異な点
がある。第一に種々の慢性疾患に合併す
る病氣があること、第二に症状が明瞭に
出ないこと、第三に予後判定に難渋する
ことなどによつて、老人の疾病はかなり
治療しにくい。しかし、このような老人
の疾病であっても早期発見、早期治療に
よつて、回復もすすむのであるから、定
期的な健康診査を行なうことが望ましい
ことはいうまでもない。だが現状では、
健康診査の受診率は、老人の半数に満た
ない四六・五％なのである。受診しない
人の中には、受診の結果に対する不安や
年のせいだからという諦めをもつ人もか
なり多い。このように老人が疾病にかか
りやすい上に、慢性化するために長期間
の治療を要することになれば、当然まわ
りの人間に影響する。

寝たきり老人

昭和四三年全国社会福祉協議会「居宅
寝たきり老人実態調査報告」によると、
寝たきり老人の介護者は、男性の場合

その妻が五〇・一%、嫁が三四・四%、娘が八・七%、息子が一・九%、孫が一・二%、その他が三・六%、女性の場合、その夫が七・七%、嫁が六〇・六%、娘が一八・五%、息子三・二%、孫が四・〇%、その他が六・〇%となっている。配偶者のいない独身後期においては、嫁の介護が高率を示している。

「恍惚の人」の中でも、嫁の昭子さんが、瀕死の重病から持ちなおした舅に対する義理の薄情さに反発して、「よし今日からは茂造を生かせるだけ生かしてやろう、誰でもない、それは私がやることだ」と決意している。昭子さん夫婦は共稼ぎであったので、病気になるまで茂造老人のめんどうをみかねて、昭子さんは老人ホームその他の社会施設利用を思いついた。個人主義と核家族主義を主張すると、独身後期の者は、他の核家族に迷惑をかけることなく生活するには、老人ホームなどの社会福祉施設を利用するより方法はない。アメリカでは発達している、富豪向き、貧者向き、地域社会立、教会派立、会社立、などその種類は多い。欧州もよく発達しているが、日本では老人ホーム入居希望者が少ないこと、予算が少ないこと、設備内容も欧米に比して劣っている。このわが国の社会施設の不備が、茂造老人の場合には幸いして、よく

世話してくれる昭子さんのそばで一生を送ることができた。茂造老人の考案さかげんにあきれはたして恋も終ってしまつた隣の婆さんもいつしか寝たきりとなり、その嫁が、「お婆ちゃんがおむつを要する度に早く死にたいって泣くんですよ。私に済まないと思つらしいのね。昔められた頃は憎い相手だったけど、奥さんが言つてたみたいに私も齢をとるんだと思つて、ちよと他人事じゃないですわ。うも、私は特別養護老人ホームを見てから、考えが少し変わったんですよ。私がお婆ちゃんをきちんとい見送れば、自分はあるならないですむんじゃないかって気になつたんです。これ理解じゃないですね。」と言ひ、昭子さんが、「私も、なんだか似たような心境なんです。信仰っていうのかしら、宗教っていうのかしら、神さまに奉仕しているような気がするときがあります。」と答えているのは、日本の寝たきり老人を抱えた主婦の典型的な会話であるような気がする。

日本の社会では、価値が集団の要請と密着しすぎていたところから、個人の欲求充足はそれ自身で正当な権利であると認められなかった。しかし太平洋戦争の敗北を境にして、公的価値に傾いていた個人が、私的価値に傾斜することになり、個人の幸福の追求は、今やそれ自身で正当性を主張し得る積極的な価値となった。

このような充足価値への傾斜は、欲求の昇華の機能を果たす規範の無力化をひきおこした。欲求の直接的充足を制限し、そのエネルギーを文化的理想の追求や人格の完成に向かつて通路づけていた明治維新前の儒教主義の倫理は、維新後の開国にもなつて伝播された個人主義の文化と衝突し、相互が中和し合つて一種のアノミー状態が出現した。

敬老精神

伝統的敬老精神は、中国の儒教の伝来に由来する。四書（大学、中庸、論語、孟子）や五経（易経、詩経、書経、春秋、礼記）を基礎として、孔子は五倫（人の道徳とは、父子に親あり、君臣に義あり、夫婦に別あり、長幼序あり、朋友に信あり）を唱えた。個人が修養して身を修めると、家族は円満な生活ができ、家族が円満になると国家に平和な秩序ができると考えた。敬老精神は、五倫のうち長幼序ありの解釈として生まれてくる。年長者と年少者の間に秩序を設けよ、ということはとりもなほさず年長者に従順であり、明白以来の啓蒙の結果、猛獣を奮っている現在、敬老精神が見落とされがちなのも無理はない。又、かつて老翁の権威の實質的条件をなした種々の力は、

教育の普及につれてその価値を失ひ、それと共に親の権威は、今日ではもはや成長した子供に対して年齢の権威としての實質をもたなくなつた。しかし人間の家族は、生物学的法則（デュラは、子の親に対する養育には、親の子に加える養育に見られるような生物学的根拠がないといつてゐる。）のみの作用する場所ではなくて、心理的、社会的法則のより強く作用する場所であり、また権利と義務のみの支配すべき世界ではなくて、道義のより多く支配すべき世界である。そしてもしこのことを認めるとすれば、親子従属関係の新たな理念が、親子の人格愛の実現と共に生まれる、自然的自律的なものでなければならぬ。（清水盛光）

最後に、ボーヴォワールの「老い」から次の文を引用したい。
「人間たちが自己の存在に附与する意味、彼らの価値体系の全体こそ、老年の意味と価値を決定するのである。逆に言えば、ある社会は、老人をどう扱うかによつて、その社会の原理と目的の——しばしば注意ぶかく隠蔽された——真実の姿を赤裸々に露呈するのだ。」

（評者は大学院生）
（たけうち・ちよ）
（新潮社・六九〇）

金鶴泳断章

在日朝鮮人とのこと

山園 勝

問、共産主義の組織は、いまの諸民族に対して

どんな態度をとるだろうか？

答、保留

(エンゲルス・共産主義の原理)

日本で生きることの困惑を対象化

「世界を獲得するために」と登場した日本の新左翼運動が、その運動の主標題とした国際主義をとなえてから一〇年以上の歳月が過ぎ去った。そして今、私たちはその言葉の眞の意味で、国際主義のかけらでも手に入れたらどうか？

今更、李珍宇や金鶴老を持ち出すまでもなく、私たちの回りには差別は日常化されて存在する。そして、それは一九二三年の関東大震災における朝鮮人虐殺当

時の「日本人」の心性と、現在の「日本人」の心性との間の隔たりをほとんど感じさせはしない。露骨な政治過程はその表層には姿を表わさないとしても、その

深層では擬制共同体Ⅱ日本の同化、異種排除の抑圧構造が再生産されつづけている。たとえば、六二年十一月から七〇年五月までに計一一七件の朝鮮人高校生への暴行襲撃事件(注①)が報告されている。そして、その暴行事件の特色は余す

ところなく、擬制共同体Ⅱ日本の抑圧構造の強固さを表わしている。加害者側の日本人高校生は「流私立高校(ブルジョ

アのランク付による)の学生であり、一流高校と呼ばれている高校生はほとんどその加害者の中には入ってはいない。それは一流高校生の方が、二流高校の学生よりも優秀であるというのでは決してない。かつて、丸山眞男が「……抑圧の移

譲による精神的均衡の保持とでもいうべき現象が発生する。上からの庄迫感を下への恣意の發揮によって順次に移譲して行く事によって全体のバランスが維持されている体系(注②)」と、語った社会的な抑圧構造を表現しているに過ぎず、より上位に位置する人間は、自らの手を汚すことなくこの抑圧構造の再生産を押し進めているのである。

民族文化をうまく自らの政治過程の中にとり入れたブルジョア國家にあっては、差別Ⅱ抑圧構造は、民族問題という形で

もって表われ、意識される。そこでは、民族の違いは決定的な違いとして両者に作用する。政治過程をゆきにしては語れない両者の關係が、現実の生活の次元においてはずっと無視され、お互いに排除し合う。あたかも、生来の旧敵のごとく。

我々が世界と語る時、それは決して現実の國境線を超えただけではなく、我々の内的世界、あるいは我々の生活共同体そのものの深化Ⅱ眞制への獲得というところが問題なのではないのか。しかし現実の我々の世界は、なんと狭く浅いのか。日常茶飯事に接する在日朝鮮人とすら回路を結べない我々にあって、我々が語る国際主義の内実とは何んと貧弱にして皮肉なものであらう。私は、金鶴泳の文学を、文学としてとらえ、紹介する任

に値いする人間では決してない。私は文学というものに対しては門外漢であり、彼の作品を在日朝鮮人文学という形でもって受けとめられない。又、そういった区別性が成り立つものであるかどうかも解らないし、関心はない。ただこの擬制共同体は日本で生きることの困惑を對象化している一人の作家の切実さと接することによって、私はずかばかりでも光明を見つけたという過ぎない。

整序された言葉による観念的解決

金鶴泳がその作品の中で日本人との関係をあつかった箇所はそれ程多くはない。多くはないが、その中にあつかわれた問題は、ある切実な響きをもつてせまってくる。その関係の多くは、生活の次元における日本人と朝鮮人の最も深く関わらずにはいられない関係である。彼が作家として世に出た最初の作品「凍える口」、朝鮮人の主人公と日本人女性との関わりに関して、「ほくが吃音者であることや、朝鮮人であることなどは、道子には問題とはならなかった。たとえばほくが朝鮮人であることの意味は、道子がどの程度理解しているのかは、わからない。が、道子としても、そのようなことに思いを馳せること自体、すでに無意味だとい

うふうに考えている様子だった。道子はほくに純粹に一人の人間を見ており、国籍などは、人間を表面的に類別するための符号にすぎず、末梢な事柄ではない」と日本人女性の意識を書いている。ここには整序された言葉が、言葉としてある正しさを持って完結している。生活の次元における現実相と無縁に、自己転回された近代主義的観念の羅列は、それゆえに、現実の矛盾を少しも抑え上げることなく自己完結してしまっている。そういった意味で、この「凍える口」で表現されている主人公と日本人女性との関係はある白々しさを伴い、夢想された世界の、その限りにおいては、現実に予想し得るべきことの個人的な観念的解決を表わしている。しかし、それが現実の社会の中にあつて、どれほど虚偽に満ちた観念であるかは作者が一番知っているように思う。

だからこそ、「まなざしの壁」における主人公と日本人女性との、「明瞭な理由もなく」別れねばならなかったという関係を描くことによって、「凍える口」における整序された言葉を、自ら否定し去っている。「まなざしの壁」における主人公と日本人女性との関係の破滅は、明らかに両者につながる生活の次元においての、具体的な人間関係の調整の困難さを表わしている。この作品に出て来る

日本人女性が、その主人公から去ったその裏には、日本のなまなま農村社会における生産単位としての家の在り方が、戦後社会においていかに風化しているとはいえ、今なお、日本人の心性の奥深くかんじがらに縛りつけていることを表わしている。擬制共同体の中で、生きていく為の自動制御装置としての家が、朝鮮人との結び付きの中で破らねばならないだろうその差別と抑圧を未然に防ぐため、「まなざしの壁」に出て来る日本人女性に別れを強いた。だから彼女が「明瞭な理由もなく」この主人公から去ったことの理由は、まさにこの社会の擬制の表われなのだろう。

そして、その逆に在日朝鮮人は過酷な擬制共同体の中で朝鮮人であるという属性故に、差別され、疎外されねばならなかった時、最後の共同性を家求め、それゆえに、日本人という属性を徹底して憎悪する。その憎悪は彼らが生きていく為の支えですらある。それは最近作「あるころらんぶ」の中で、如実に表わされている。主人公の姉が父親に日本人との結婚の許しを得ようと「ええ日本人です。……………」でも、いいんで。朝鮮人のこともよく理解していないくて、困窮のことでも構わないといっているし……」と語った時、この父親は激怒して、「構わねえとは何だ、朝鮮人でも日本人並

みに扱ってくれるというわけか」と叫ぶ。この怒りは、又作者の怒りでもあるのだろう。この怒りの前に日本人は如何なる言葉で、如何なるもので彼の心を慰撫出来るというのか。作者にも共通する心性ゆえに、「凍える口」とは逆に、一度も主人公の姉の相手である日本人男性を登場させはしなかった。もしこの怒れる父親の前に、主人公の姉の相手である日本人男性が姿を見せたとしても、彼は「凍える口」の、あの整序された言葉以上は語れないだろう。そして、その言葉が怒れる父親の心を決して納得させはしないだろうことも作者は知っている。知っているがゆえに、「凍える口」の整序された言葉の幻想性を自ら否定してみせる。だからこそ、「あるころらんぶ」における主人公の姉が、父親の前から姿を消すことによつて、問題の解決にはならない「解決」で、この問題の決着を着ねばならなかったのである。

両者の「まなざし」を併せ持つ

現在日本には、六〇万人強の正式に登録された朝鮮人と数百万といわれる密入国内の七〇%以上が日本生まれの二世、三世達である。そして、その内正式な民族

教育を受けているものが、日本人学校で教育を受けている者の三分の一ぐらいしかいないという現象がある。(注⑤)その現実の中にあって、日本人学校で教育を受けた者はほとんど例外なく、自らの存在の不安定さになやまされる。李珍字に象徴的に代表されるように、日本人化

した彼等は、決して先天的に自らを異族として、この社会に自己を確立させようとしているのではない。日本という社会が、彼等の属性を徹底的に排除し除外した結果として、彼等は自らの置かれていた矛盾を「朝鮮」として意識し、そうすることによって、不安定な存在に言葉を与えようとする。しかし果して、彼等の民族をとりもどすという作業の中に、彼等の復権と自己存在の確立があるのだろうか。

朴寿雨が執拗に、李珍字に民族性を獲得することを求めた時、彼は民族性の獲得が、即ち日本人化し自分の存在を見失った自己を復権出来ることになることを考へなかつたのではないか、だからこそ、殺人という形でしか自らその復権を社会的に対象化しなかつたという事実を、死んでみせることによつて一応の結末をつける。死という形で自らの行為を完結してしまつたがゆゑに、彼が抱え込まねばならなかつた日本人社会での朝鮮人という存在の矛盾を、半永久的に我々の前

に突きつけ続ける。彼は決して声高に叫びはしないし、我々日本人を告発することさえしない。しかし、しないという事実によつて、彼の絶望と、この擬制共同体と日本の共同倫理の虚偽性を一層きわだつたものにし続けている。

確かに、在日朝鮮人二世達の悲惨は民族を徹底的に収奪されたということにつきるだろう。しかし、その子や孫である在日朝鮮人二世・三世達の悲惨は、決して民族を喪失したという事にあるのではない。民族という概念を生活様式という範囲に限つてみるなら、彼等在日朝鮮人二世達は朝鮮的であるというよりも日本的である。生活感覚のすみずみまで日本化して育つた彼等が、成長するにつれ朝鮮という出自を自らの意識の内に入れねばならないのは、擬制共同体と日本が彼等の属性をタテにとり彼等を徹底的に排除し差別する結果なのだから。何故なら、基層文化即ち生活様式としての民族性が、基層文化はあり得ない、在日朝鮮人が日本であるほうが朝鮮的であろうが、その限りではなんの意味も持ちほしめない。

ここに、民族という概念の持つ政治的側面が浮かび上がってくる。民族という概念が一般的に人間の意識に作用し始めるのは、近代国家成立以後の事であり、近代国家が民族国家として組織されたのは、近代国家が基層文化即

生活様式を、民族を構成することによつて自らの政治過程の内にとり入れ、ブルジョア支配の貫徹を容易にするためである。近代国家が民族国家として組織されたのは、ブルジョアジーの政治意思即ち象徴様式が近代民族国家であるということとでしかない。

在日朝鮮人二世達が、自らの復権を民族性の獲得の内にとり求めようとするのは、ブルジョアジーの収奪と除外が、民族という装いを被つて行われる裏返しなのだ。でも、そうとばかりは言えない難い面もある。それは彼等の親達の存在である。

在日朝鮮人二世達はまぎれなく「朝鮮」そのものである。彼等は自らの奥深く朝鮮を抱え込んでゐる。抱え込んだまま支配民族としての日本に民族性を収奪された。しかし、在日朝鮮人二世達は如何に民族性を収奪されても決して日本人化しなかつた。在日朝鮮人二世にとって、彼等は「アボジ」であり「オモニ」であつて、決して「おとうさん」や「おかあさん」ではありえない。在日朝鮮人二世達の持つ「朝鮮」とは彼等の生そのものである。その子や孫達がそれを相続する以外に一体誰か正当にその生を相続し得るといふのだらう。

彼等は、日本人という属性そのものを徹底して憎悪する。日本人憎悪が、彼等を支えるバトスですらあるといつても決

してウソにはならないだらう。民族性を獲得するという作業の中に、自らの復権を求めるとき、彼等の意識の内から徹底して、あらゆる意味において日本を排除し、無視する。それは、内政不干渉といった政策的な次元とは、又別の意味合いのものとしてある。物覚えがつかないその時から、「日本」をふりかざして、彼等を排除し差別しつづけた日本人を、彼等は如何に言葉の上で、コスモポリタンの、あるいは、階級斗争史観的に語るうとやある、憎悪し、意識の内から排除せねばやまない対象なのだらう。

我々日本人が、民族という言葉から受ける感じと、在日朝鮮人達が受ける感じとは、非常に隔たりが感じられる。その理由としては、我々日本人は、民族運動の勃興期、成熟期、没落期といつて今サイクルを終えたが、朝鮮人にとつて今は勃興期であるという歴史的な時間の差異があるのだらう。私には民族性というものが、それ程重要であるとは考えられない。これは抑圧民族の鈍感さなのかもしれない。少なくとも、同じ生活圏で生きている日本人と在日朝鮮人とが共存するために、政治過程の混入した民族性は阻害物であつても、役に立つとは考えられない。とりわけ、日本人にとってはなおさらである。

そういう意味において、「まなざし



の壁」における次の文章は印象的である。
 「日本で生まれ、日本の教育を受け、日本
 の風土のなかで生きてきた、そして今
 後も生きていくであろう自分は、自分の
 なかの「日本人」からもまた、のがれる
 ことはできないであろう。朝鮮人でも日
 本人でもないというような、あるいは、
 朝鮮人でもあり日本人でもあるというよ
 うな、そういうものとしての自分の宿命
 から、自分のがれることはできないで
 ある。——それでもかまわないではな
 いか？ ああ「まなざし」を産む側の人間
 と同時に、あの「まなざし」を産む側の
 人間、その両者を併せ持っているがゆえに、
 そういふものとしての自分を知らぬことよ、

かえって自分は、その「まなざし」の正体を
 見定めることができないのではないか。その
 「まなざし」を生きたたいた國家、あるいは民
 族、あるいは人間というものの内、より深
 く考えられるのではないか。そして、それ
 について知りつくすことにこそ、あるいは
 は、知りつくそうと努力することのなか
 にこそ、自分にとっての眞の解決がある
 のではないか。……」、金鶴泳がこのよ
 うに語る時、我々は、彼等在日朝鮮人二
 世連の苦悩が、日本擬制共同体を相対
 化し、その共同体の虚偽性を白日の下に
 さらさすには置かないことを知らされる。
 そして、彼等の苦悩と復権への叫びが、
 日本そのものを解体し止揚せずには置か

ないだろうということも、又明らかであ
 り、それを我々が受けとめることが現在の
 桎梏を突破し得るのではないかとさえ
 私には思われる。

共同作業と共同倫理の創造方法

日本人と朝鮮人が深く関わり合ひこと
 は、お互いにとんとタプーに近いもの
 がある。いかに政治過程の結果とはいえ、
 継目を見つづけることが困難なほどに我々は、
 感性の奥深く排外性と差別性を身にま
 つている。それゆえにか、我々はある種
 のとまどいを覚えることなく「朝鮮」を
 語れない。そして、そのある種のとまど
 いが原罪意識という何の意味もない概念
 と結び合わされる時、在日朝鮮人と回路
 を結ぶ作業は中断せざる得ないはめに陥
 る。現実の人間関係にあつては、そんな
 感傷は何の意味も持ちほしはなし、自ら
 その意識を脱出口のない迷路へとさそ
 こんでしまふ危険性を多分にはらんでい
 る。

一〇〇年になんなんとするお互いの不
 幸な歴史を払拭するものが、この一〇〇
 年の歴史を凌駕する共同作業と、共同作
 業を通して獲得される共同倫理なのだ
 ということは解りすぎるぐらいに解ってい
 る。しかし、一体何から手をつけるべき

なのか？

「アー イントナシヨナルロ インリ
 ユガ トルチリ……」と、インターを口
 ずきむ彼等に、私はどのように回路を結
 べばいいのだろう。お互いにお互いを視
 野に入れないが、決して認識されざる者
 として半永久的に排除しあうのだろうか？

〔注〕

- ① 在日朝鮮人の人権を守る全編、「朝
 鮮人高校生への暴行事件の真相」によ
 る。
- ② 丸山真男、「超國家主義の論理と心
 理」(「現代政治の思想と行動」)に収
 められている)
- ③ 一九六七年五月文部省調べと一九六
 七年四月総連教育部調べによる。

(新鋭作家叢書、「金鶴泳集」・河出書
 房新社刊・六八〇)

(評者は商学部三回生)
 やまその・まさる

今日を充たす界限、

あるいは昨日の明日を生きた人々

当脇雅恵

「ニッポン釜ヶ崎」 大谷民郎著

「ニッポン釜ヶ崎―地図にない町―」と題されたこの本の帯のツカの所に「庶民の体臭と哀歎」と書かれている。なるほど、これらの内容が庶民を描写したものであるなら、この本を読んだ、あるいはこの本を店頭で見つけた我々は、どういふ屬性をもつ民になるのだろうか。読後に改めて自問し、推薦にあたっての黒岩重吾氏の言葉に嫌悪とも言えない身震いをうながされる。

「或る意味で、釜ヶ崎は私の心の故郷でもある。」

小説ふうになっているものの、コード番号は「社会問題」として扱っている。便利なジャンルがあるものである。「社会性を含んだ創作」は得てして官許テレビ局の企画に利用されるが、この作品はまぬがれてはい。

まず、恥辱に値いしても認識の訂正を余儀なくされたことから告曰する。

家賃一万五千円の部屋というのは日家賃が五〇〇円という意味で、ここに書かれている場合その狭さたるものが「畳なのである。建物らしき中のせまい通路の両側に押入れを嵌めたような一段すつの棚があり、そのくぎられた空間の色さまざまなカーテンの内側に一つ一つ世帯が形成されているのである。上段の者には

梯子が用意され必要に応じてあちこちに廻される。当世、折りたたみ式の二段ベッドにさえ梯子は固定されている。そして梯子を上げれば、畳一枚一五〇円、二畳で三〇〇円の「部屋」があり、窓はなく明りは背中をくっつまるめなければならぬ高さの天井にはめこんだガラスを通してのみ来る。子連れの場合、畳の三〇〇円と布団代と二人につき二〇〇円の追加で五〇〇円をくだらないらしい。一日にこれだけの金額を払うために、つまりここに住むが故に、これだけの失費を招き、それ故にここから抜け出せないという悪循環。

冷房完備のマンモス簡易旅館、十階建のもあつて温泉地の一流ホテル並みの風情好。歌い文句のこの冷房は、外気との換気がなく内部の空気が循環する。開放性の結核患者がおれば、結核菌も循

環するわけで、感染すると恐るべきスピードで悪化する。真に字のごとく悪循環である。荒れ狂う馬が駆けるように、という形容からつけられた『奔馬性結核』の釜ヶ崎における集中発生は、ドヤの外観改築ブームが原因といわれる。

屋台のラーメン屋をしている子供に何とか養なわれている老人が、三畳と二畳の二間で三人の子供と雑居している。親子という建前は、実は死んだ母親が三人に共通であっただけで、この男はそのうち誰の親にあたるのか定かではなかった。末っ子に至っては、明らかにこの男の七年間の服役中に生まれているのである。そうかといつて上の二人に対しても場合によつたら年下の方の父親であるかもしれないというだけである。

年頃の兄妹は、当然のごとく一体とな

った。掟があつたとしても、カーテン一枚を隔てた一老人の寝返りの音で抹殺され、絶え間なく寝返りを打つ中でその契りに著慮ぶつて無関心を示す方が、老人にとつて明日への持統が保障される。すべてにおいて筋を通しはならなかつた。老人だけに限らず、二人の若い男女にとつても、バラックに住み着く人間にとつて背景を明確にすることは互いにタブーなのである。

夜半に酔つた四十男が、己れの帰りに着くバラックを間違えて他人の仕込に入りこむ。翌朝、気がつけば見知らぬ女が寝ていた。平気を装いつつ、気まり悪げに男は端金を置いて出て、事は終る。暗黙の事後処理は、女にとつて自分の亭主の行為と相殺であり、男にとつて自分の女房の行為と相殺になるのであつて、結果的に「原則」は安泰なのである。所謂、その原則自体に効力がないのは世の夫婦に問えば同意を得るが、だからと言つてここで原則を弄んだとしても、赤裸々な男女の生懸に昇華する契機になり得ない。悲劇が起きるのは頑なに原則に固執する秩序者の自業自得の結末。環境が人間を、自ら作つた制度の内に融解させるという現実の一コマを不法占拠のバラックは展開する。

雨が降る。長い夏への前奏を梅雨は奏でる。その日暮しのリズムは遮断され、

パンと水とでつなく世帯ができ、空腹のまま寝たきりでいる者もあり、彼らだけの屋根のうちに、トタン板を置いただけの無根を打つ雨音と壁代りのベニヤ板の中で、屋外の道との区別がつかないほど泥だらけの土間を動きまわるネズミと共に、自然の良心を待つ。

暗く沈んだ空の下を飛びあがるようにしながら、泥道を通つて老人は焼酎を飲みに出かけた。誰にも触れさせない腹巻の中の刑務所からの領賃金にわが身を休ませ、外観はおとなしく一切の無関心を装うと「子供」は受け入れてくれる。そして垢だらけの金で焼酎のコップに明日への夢を託す。それだけなのである。欲のすべては、怠惰そのものが生への情性を持続させ、生理機能の正常さのみが人間の証であつた。

城壁のごとくそり建つ高架線のコンクリートの壁にしがみつくり組まれたバラックの壁に見て、きれいな色の電車は郊外の緑を求めの人々を切り目なく運び行く。その不変の「調和」が所得倍増を助長し、高度成長を推進し、ついには万博景気の目の華やかさまで支えた。そして博覧会は、ビールの味を釜ヶ崎に残して、終つた。

親方のもとから屋台を借りてのラーメン屋は、厳重な掟のもとで就業場所では定まつていた。共倒れしては、一度と掴み得

ない釜ヶ崎に於ける定業従事者たちの自然原則であつた。長雨が続けは、寝て呼吸を保つてくれないのは日雇いの労働者だけではない。動くラーメン屋にきても同じである。その上、商売はできなくとも借賃は払わねばならない。売り子たちはわが身の原始的な姿に矛盾を感じ、組合結成の案を練り出した。親方は恐いけど勇氣を出さば、やと下地固めに急ぐうちにボスの方から先手を打つてきた。

「おまえら、文句の言える身か。公園の青カンで寝ていた奴、血を抜いて五分と立つていられた奴をここに連れて来て、屋根のある所をあてがってやつて、まぢまちで手間はかりかかる味のつけ方まで手を取つて教え、統一して案になつた筈や。……………」

そして屋台車の改造を始める一方で、造反をもくろんだ売り子の車を焼いてしまふのだった。それに反目する売り子たちは商売を休むことで主張を貫徹しようとする。

ここまではどこにもある主従関係であつた。日銭を削つてまで守る志気が、その日暮しの人間にとつて何の支えになるかと、第三者が売り子に声援を送りつつも、不安に駆られ始めるところで、著者の諦め操作が一気に締め括りを急ぐ。スト宣言を突きつけられた日に、親方はいつものようにボクシングの選手権大

会のテレビ中継の見物を、売り子たちに誘う。誘われた彼らは、親方宅の床が抜けるほど集まつてテレビに見入るのである。

平和を願う良識者たちがこり笑うような幕切れに不満をいだくと息巻いて、また、自分自身の行為と一致するのを確認して苦笑するのが落ちではないか。作者のストーリー性に口をばさむ気は毛頭ないが、そもそも、ラーメン屋台の売り子たちが親方という一個のはっきりした対象に対して立ち上る姿勢の基盤は釜ヶ崎を形成する人間のどこを響きあふのだからか。その日暮しの故に止まらなことを知らぬ循環体の深淵に、実際、的を定めて射る必然性があるものなのか。

ほんの些細なきっかけから騒動が起り、連夜に亘つて舗装されたはずの道路から投石が続く。交通機関はストップし、商店はシャッターをおろす。群衆と同数程度の警官を動員して、何が何でも大量検挙という暴力で処理にあたる。三六年以降、あるいは地区と呼び換える、明るい水銀灯を設置し、公園を造つた。有識者を外国に派遣して、スラム対策の会議をもつ。が、依然として石は飛び、暑い夏は長い。物々しい完全装備の機動隊にたちまち追い散らされても、再びはね返ってくる顔々は、過去の表情をも刻みこんでいるのである。

この土地において、子どもほど厄介なものはない。預かってくれる施設はあっても、申し訳として常時「清員」なのである。改築が急増しているのに、子連れに貸してくれるドヤは在りにくく、見つかったも部屋は形容に尽きるむさくるしさで追加金が必要となる。親子共倒れになる。当然、子どもを預かる商売が出没し、その料金をあてに食いつないでいくのが出てくる。

明治後期の話、妹が、未亡人になった姉の身を案じて、マツチ工場に戻って惨死させるよりはと、「子・預り屋」を思いつく。死んだ亭主の子を孕んでいる姉に強く堕胎を勧め、その時世話になった産婆に聞いた話を思い出したのだ。生後数か月の赤ん坊の引き取り手がなく、礼金についてはものの「罫置」に困っている、とかであった。人助けをして、金もうけができる。姉を口説くまでもなく、妹はあっさりこの商売を始め出した。ひとりの子供についてくる礼金は、マツチ工場で稼ぐ一カ月分より多かつたが、消費のみに終るのだからたちまち底がついてくる。一時しのぎの金は、常時しのごに昇格せねば生活は創造できない。赤ん坊の回転が必要にならず。死んだ亭主の男の味が忘れられず、もうろうと日々を送る姉を外出させては、その間に妹は赤ん坊の始末をつけた。迷路的

ような露地裏の住民は、己れの今日の保持だけで精一杯であった。隣人が「子を預り屋」を始めていようが、いつの間にかその子がなくなつて別の子が来ていようが、己れの口の存在だけが肉體維持の義務を駆りたてるのであるから、生まれ落ちた他人の子のことなど全くの無関係であった。妹は新しく産婆を求めては、赤ん坊の預りを引き受け、礼金を受け取り、姉と分けあつて、まもなく預り物を葬っていく。姉は詳細を知らされず、もっぱら親観や買い物に出され、いい思いで日を送るようになった。それを支える事業の方は、捨て場所が底をつき出すが、灯台もと暗しであった、附近の誰も使わなくなった古井戸の世話になり出す。くるくる衣類やボロにまるめて投げこんだ。何個となく井戸は吸い込んでいった。落下していく嬰児たちは、「生」を押しつけられる以前から約束された宿命であるなら、必ず誰かによつてその道程を行かされるはずである。彼女らが、たまたま執行人となつたにすぎないと弁護するのは、首を賭けた放言とみなされるだろうが。姉妹は、露地裏の住民に罵倒され、巡查に連れてゆかれる。その後、その露地裏は「悪」の代名詞となり、ついに住民たちは捨てられるに至る。

生あるものの抹殺が、罪悪として個人に覆いかぶさるなら、現象の外郭を崩壊

に導く、より外側の圧力は何のもとに免罪符の切り売りを行行するのだろうか。「悪」の存在を認めたのは人間自身であり、「罪」の規定を唱つたのも我々自身であった。著者がにおわす政治不在に、果して「悪」なるものを産出する威力はあるのだろうか。「生」自体を「善」とみなした人間そのものの宿命の青写真が、釜ヶ崎などではないだろうか。そこには御破算で願ひましてはと、一旦くすした珠の空間に既成の真理は毀せへつていない。

「ルンペン・プロレタリアート、旧社会の最下層から生まれ出されるこの無気力な腐敗物は、ところどころでプロレタリア革命によつて運動に投げこまれるが、彼らの生活状態全体から見れば、むしろよるこんで反動的陰謀に買収されやすい連中である」(共産党宣言)のような伝統的な権威ある分析を、第三者の地位を確保してしまつた我々は、何を本音として自己の位置との結合を拒むのか。情性とも言えない、生存の強要に答えるべき日常の繰り返しが堆積し、その隙間には葬られた自我、あるいは欲望。それを脱体制としての有事において表現することが革命への導火線になり得るといふ見方はあるかもしれない。短絡的な偏見を述べれば、釜ヶ崎こそが現代日本の

唯一の解放区である、となるのではない。しかし、そうすると前記の身震いをおぼえた黒岩重吉氏の言葉「或る意味で、釜ヶ崎は私の心の故郷でもある」が、最も端的な表現となつてしまふ。

エゴイステイックな感性で「故郷」をまつりあげた線上に釜ヶ崎を置くことになる。故郷、故郷といつて、我々は、現在どれだけの「故郷」を踏みにしていることか。大多數の市民と組織は、流民の、終焉地を、バネに、浮上を計ろうとする。革新という衣を着てねり歩き、唱い歩く。

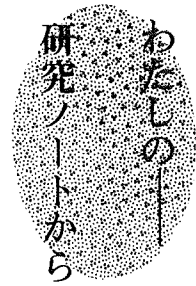
暑い長い夏があれば、寒い長い冬もある。エネルギーを証した群衆が、霜に囲まれて、個別消失を遂げる時もある。生と死——あまりにも物理的な現象が釜ヶ崎を一切語り、唯一の絶対的にヘゲモニーを略奪され、輪郭としての幻影のみが権威を誘う。だのに、なおも過程を否定した釜ヶ崎は存続していく。

(評者は文学部四回生) とうわき・まさえ (番町書房・五八〇)

日中文化関係史の一面

(VII)

増田 渉



松陰は見えていない
『道光洋艘征撫記』

前に引いた「丙辰日記」にも見られるように、松陰は毎日のように抜き書きをして、随分くわしく「聖武記」の勉強をしているが、この第十卷「道光洋艘征撫記」は見えていなかったであろう。それは松陰の「聖武記」勉強が、そのなかの「事余記」の部分だけを翻刻した日本版に拠るものであったと思われるからだ。たとえ原本「聖武記」を見ていたとしても、当時日本に来ていた「聖武記」には、この第十卷末尾の「道光洋艘征撫記」、つまりアヘン戦争を扱った部分の入っていない「聖武記」であったと考えられる

からだ。

アヘン戦争が削除された
『聖武記』

少しこまかい話になるが、このアヘン戦争を扱った第十卷の末尾部分は、道光二年（一八四六）の第三次重訂本にはじめて入れたものだと いわれる。ところがいま私の所蔵する「四部備要」本（「四部備要」は戦前「中華書局」出版の義務で、良書を集めて翻印したとされる）の「聖武記」六冊は、「古微堂原刻本」に拠るものであるが、目次の後に附言がある。種々改訂の個所についてのべ、「これは第三次重訂本」だとして、最後に道光二年の記年があるにも拘らず「道光洋艘征撫記」つまりアヘン戦争の部分は出版された「世界書局」本の第三次重訂本「聖武記」にはこれが入っている。「世界書局」本は何版に拠ったかを明らかにしていないが、かつて清の末期、上海の「申報館」がこの書を出版しているから、恐らく「申報館」本に拠ったものかと思う。その「申報館」本に拠る本は、

ない。この「書目」（正、統一集）の「聖武記」は「三十年来、人世に流伝したが、また忌避するところあるの故を以て、竟に「道光洋艘征撫」の両記（上下両記）は強行刪汰し云々」と見え、だが「いまその元本によってこれを刊す」といっている。「四部備要」本の拠つたという「古微堂原刻本」も、当時世間に流布したものには「道光洋艘征撫記」は刪汰されていたようだ。

当時は無惨な敗北を喫したアヘン戦争について云々することは、中国としての面子にもかかわることであり、忌避されたのだからと思うが（「強行刪汰」は誰がしたのか明らかでないが）もし「聖武記」のこの部分がわが国に伝えられていたら、焦眉の問題について教訓する資料として、いち早くこの部分が翻刻されていたにちがいない。もっとも翻刻といっても出版には官許を要したので、果してどうなったかは分らないにしても（斎藤竹堂が書いた「鴉片始末」は刊行を禁じられて写本で伝えられ、私の所蔵する同書も嘉永三年の写本だが、昭和二年になってはじめて印行されている）、少なくとも写本でなくとも伝えられているにちがいないのに、いまその形跡は見られない。

ハリスの脅迫的演説

鎖国時代の海防策とか、清朝政権の武功だとかは、いまのわれわれにはほとんど興味をひかない。ただアヘン戦争は世界史の問題、少なくとも東洋の歴史にとつては大きな問題であった。中国ではアヘン戦争に敗れてから「近代」に覚醒したとされるし、わが国にとつてもアヘン戦争を契機に、歴史の方向が大きく転換したといえる。わが国に通商条約の訂結を迫ったアメリカ使節ハリスは、イギリスは清国を屈服させた余勢を駆って、次には日本にアヘンを持ちこんでくる、もし拒否すれば香港にいる軍艦を日本に差

し向けることになるだろう、自分は香港のイギリス総督からそれを聞いてると、安政四年十月、華頭老中の堀田正睦邸で、幕府の首脳たちを集めて大演説をする。びっくりにした幕府は、ついに開国に踏み切らざるを得なくなり、以後の日本の方向は決定づけられたわけだが、この時のハリスの堀田邸での脅迫的演説は、「亜墨利加使節申立書」として写本でかなり広く伝えられたようだ。私もそれを数種所蔵するが、この申立書は、木村芥舟（幕末の軍艦奉行、海軍所頭取）の「三十年史」（明治五年、交詢社）にもあり、（大隈重信の「開国大勢史」もこれを引用）、勝海舟の「開国起原」（明治二四

年、宮内省）にも載せており、また内藤耻斐の「開国起原安政紀事」（明治二年、東洋堂）にも大体を記しているし、また最近復印された吉野真保編「嘉永明治年間録」上巻（昭和四三年、巖南堂）にも収録されているので、いまは活字文で見ること欠かない。このハリスの演説と幕府の反応は、とくに攘夷派にはショックであったのだろうが、私の所蔵の写本の一種に、梅田雲浜が大和十津川の同志に送ったもの（それを明治一四年に十津川山崎村の玉田音吉という人が復写したもの）がある。

福地桜痴は「幕府衰亡論」（明治二五年、民友社）に言っている（十月）二六日を以て（ハリスは）堀田閣老の邸に向いて、演説凡そ六時間に渡り、鎖国の不利を論じ、開国の必要を説き、（中略）遠くは西洋、近くは清国の実例を引証して、滔々懸河の弁を揮って説いたり、斯る實際上の政治論を聞きたるは堀田閣老は云うに及ばず、幕府の俊秀と雖も実に膽の緒を切て初めての事なりければ、胆挫かれ魂奪われ茫然として迷夢の醒めたるが如き心地したるは尤の事なりき。（中略）（後）開国の国是を執て百難に当りたる精神は、此時ハリスの演説に一痛棒を喫したるが故なりとは知られたりと。

中根雪江の「昨夢紀事」にも、「此時

参り合わせたる人の語るを後に聞けば」といつて、その席にいた人の話を伝え、堀田閣老が「辟易して、目瞬き大息するのみで、ほとんど発言らしいものはなかったように書いている。現代ふうにいえば、この時のハリスの演説は、わが国にとっては正しく「歴史の決定的瞬間」で、これから日本は新しい時代にふみ出すことになったわけだ。

手頃にとまとつた 『道光洋艘征撫記』

アヘン戦争は、とくに中国にとつて未曾有の大事件であつて、この事件について記録されたものは多いが（「中国近代史資料叢刊」に「鴉片戦争」資料六冊があり、その第六冊には「鴉片戦争書目解題」がある。一九五四年、上海神州国光社）、中でも魏源の「道光洋艘征撫記」は手頃にとまとられているためか「中国近代史資料選輯」（栄猛源重編、一九五四年北京三聯書店）にも最初に採録されている。因みにこの「近代史資料選輯」は一九四〇年に延安で出版され、以来各解放区で翻印して用いられたものを、後に内容に取捨を加え榮猛源が改編したものであることは、この書の「出版説明」に見える。

私もアヘン戦争のことに言及する場合には、梁廷枏の「夷氛聞記」とともに、





投稿大歓迎 編集者募集 モニター募集

次号予定(26号—4月発行)

■書評

- ◇ 第三帝国のドイツ文学
- ◇ 小説ふあっく
- ◇ 坂の上の雲
- ◇ 児童文学

■私の研究ノートから

- ◇ 日中文化関係史の一面(Ⅷ)
- ◇ ヘーゲル詣で(Ⅴ)
- ◇ 差別の空間構造(Ⅱ)

この『洋砲征撫記』によって史実関係をいまも確めることがある。ただしこの書の記述の不備や誤謬の箇所を、『養務始末』その他多くの資料と照合して校訂した姚薇元の『鴉片戦争史要考』(一九五五年、上海新知出版社)を併せ用いる必要がある。姚氏はこの校訂本の「前言」で、「この『道光洋砲征撫記』は確かにアヘン戦争の史事を記述した第一等の著作で、後に流伝したアヘン戦争に関する記述は、大いこの著作の化身、あ

るいは縮影である」といつているのは、ほめ過ぎとはいえないであろう。

一般的には好奇的な シヨック

アヘン戦争については、リアルな史実そのものの全体性が重すぎて、これを単に文化関係史といったものでとらえようとするのは、無意味なことのように思われる。だがいま当時の記録者述と、そのわが国への翻刻を中心に語るのであれば、

やはりそのような枠内で見ても容されるのではないかと思ふ。それで『聖武記』や『海国図志』の、わが国への翻刻や翻訳を見る前に(これもアヘン戦争との係わりで著述され、また翻刻翻訳もされたのだから)、アヘン戦争そのものの具体的な状況をわが国に伝えた当時の中国での記録、およびわが国での翻刻、あるいは諸情報、またわが国の人々のこの戦争に關する著述(小説も含めて)について紹介してみることにしよう。

この隣国の、「外夷」との戦争と敗北は、おぼろげな情報でありながら、鎖国の夢のなかのわが国にとっては、一般的にもかなり好奇的なシヨックをあたえたようで、それを反映してこの戦争をテーマにした小説読物まで出版され、私の収集したものだけでも数種ある。

(文学部教授
ますだ・わたる)

ヘーゲル詣で

IV 中 塾 肇

わたしのも
研究ノートから

ハイデルベルク(つづき)

もの本によると、ヘーゲルはハイデルベルクではフリードリヒ街に住んでいたという。そこで私はここへ着いた夕方、長女と連立ってハウプトシュトラーゼという、その名のおりのメインストリートを歩いていると、大学にほど近いところに、これと直交してネックカールと反対側にフリードリヒ街という通りがあった。といってもこれがヘーゲルの住んでいた街であるかどうかは必ずしも明らかでない。というのは街の名前が変わることも全くないとはいえないからである。実は私がそう考えたのも無理がないほど、この

街は何の変哲もない長さ二、三〇〇メートルの裏小路だった。ここにある家からヘーゲルは丘陵や栗の森を見はるかすことができた和本には書いてあるが、街を歩いているかぎりでは、両側の不趣味な家並や塀にさえぎられて、眺望は全くない。もちろんヘーゲルが住んでいたことを示すような掲示も全然見あたらない。仕方なくまたメインストリートをふらふらして、大学の傍から左へ折れて、ネックカールの畔をあのある名橋(カール・テオドル・ブリュッケ)から城を眺めた。りしながらホテルへ帰った。

ハイデルベルクにはクルプファルツ・ムゼウムという博物館がある。翌々日私はここを訪れた。ここにリーメンシュナイダーの彫んだすばらしい祭壇があることは一〇年前の訪問で知っているが、今度はここにヘーゲルに関するものを求めて赴いたわけである。というのはこの博物館の一室にはハイデルベルク大学関係の資料があることも知っていたからである。しかしそこに陳列されているのは、リッカート、ヴィンデルバント、ラスク、マックス・ウェーバー、ラートブルッフ、ヤクブス・ウェーバー、ラートブルッフ、にかけての教授たちの肖像や資料ばかりで、ヘーゲルはもちろん、彼と同じ頃にハイデルベルク大学の教授であったひとびと(たとえばパウルスやダウプ)に関

するものも手く無かった。もともとヘーゲルに関するものがあるとすれば、目ぼしいものはすべて前に記したシュトゥットガルトの展示会に移されていたであろう。

こうしてハイデルベルクにおける私のヘーゲル詣ではほとんど収穫が無かった。そしてその日の午後ミュンヘンへ帰る娘と別れて、私はケルンを経てアーヘンに向った。

私のヘーゲル遍路はここでしばらくとぎれる。アーヘンでは現代の哲学的人間学の巨匠アルノルト・ゲーレン教授を訪れた。先生は私との再会を夫人とともに心から喜んでくださった。実は私が一〇年前にアメリカからドイツへ渡ったのは、当時ハイデルベルクに近いライン河畔の古都シュパイアーにおられたゲーレン教授を訪うためであったのである。アーヘンを訪れた後、私はケルンとデュッセルドルフとの中間にあるラインの河畔の小さな村で約一週間を過ごし、ここでペルリンでの学会報告の仕上げをすませた。

フランクフルト・アム・マイン

ヘーゲルは前に書いたベルンで家庭教師をしているあいだ、それほど楽しはなかつたらしい。何よりもドイツの学界から隔離されているという焦燥感が彼を

悩ませたようである。それで彼はなるべく早く故国へ帰りがたつて、その気持を友人たちに訴えていたわけであるが、こういう希望を満たしてくれたのは、ほかならぬテュービンゲン以来の親友ヘルダーリンであった。この詩人は当時マイン河畔のフランクフルトにいて、ある銀行家のところで家庭教師をしていたのだが、ヘーゲルのために同じ市の有力な商人コーゲル家にやはり家庭教師の職を見つけてやつたのである。そこでヘーゲルは、そいそ心を弾ませながらフランクフルトへやつて来た。

中世以来の帝国都市であり、歴代の神聖ローマ皇帝が戴冠式を行つたこの市は、同時に昔から商業や金融の中心地である。(イギリスの大富豪ロスチャイルドもこの市のユダヤ人街の出身である)だから



この市はゲーテを産み、シヨール・ヘンハウアーを呼んだけれども、決して学者文人にとつて住みよいところではない。それはアドルフ・ヤホルクハイマーによつて代表される新左翼的傾向の強いフランクフルト大学の名が世界に喧伝される現代においても変りはない。故国へ帰つたことを喜んだヘーゲルにとつても、ここは所詮「不幸な市」であつた。そしてここで彼は親友ヘルダーリンを無惨に打倒して運命の悲劇をまざまざと自撃しなければならなかつた。この悲劇もつぎつめはフランクフルトという市の商人的な体質が醸し出したものであると言えよう。

ヘーゲルがここで家庭教師をしていたコーゲル家というのは、ロスマルクト(馬市)の近くにあつたという。そしてこのロスマルクトはゲーテの生家にもほどと近

く、今では大きな広場になつていて、ひとつの盛り場である。八月初めのある日、私は以前に一度訪れたことのあるゲーテの生家へ行つて見た。ここに付設されたゲーテ博物館にはゲーテと同時代のひとびとに関するものが集められている。哲学者ではカントとフイヒテはあつたが、ヘーゲルに関するものはなかつた。ただフランクフルトでヘルダーリンの悲劇の相手になつたスゼッテ・ゴントルト夫人(デオティーマと愛称される。ヘルダーリンはこの夫人の子供たちの家庭教師であつた。)の小さな半身像があつた。

ここを出てロスマルクトへと足を運んでみたものの、最新の流行品を並べた店舗の立ちならぶ広場と街をきらびやかなひとびとが往来し、さまざまの車が疾駆して、華美と喧騒があるばかりで、往時を偲はせるものは何ひとつない。また往時を想像しても思いにふけるような場所でもない。仕方なしにマイン河の方へ足を向けて有名なレーマーや市役所やドームを再訪したものの、これも道路工事で耐えられないほどの騒音である。やつとの思いで宿に帰つて、ベッドに横たわりながらラジオのスイッチを入れると、広島での原爆二五周年記念式典の中継ニュースが流れて来た。

ハイデルベルクと同じように、フランクフルトでも私のヘーゲル詣では空しい

結果に終ることになつたが、これも已むを得まい。しかし何かもう少し少な収獲はないかと考えた末、この大学にシヨール・ペンハウアー文庫があると気づいた。シヨール・ペンハウアーがヘーゲルを嫌つて目の敵にしていたことは有名な話だが、これも一興だちうと、翌日はそこへ出かけることにした。大学の付属図書館のエレベーターで乗合わせた学生に、「たしかここにはシヨール・ペンハウアー文庫があつたね」と聞くと、快く案内して文庫の係の女性に引合せてくれた。自分の身分を明かして、文庫を見たいのだがと述べると、

もちろんお目にかけますが、所長のヒュブシュナー博士にもお会いになつたらいかげすかと勧めてくれた。同博士はシヨール・ペンハウアー全集の編集者でもあり、シヨール・ペンハウアー協会の会長でもある、その道の大家である。まさかそういう人物に会おうとは思わなかつたが、こちらは上衣はもちろんネクタイもないスポーツシャツ姿である。まあそこは御勘弁願つてと、略装で来たことを詫びながら、ヒュブシュナー博士に会つた。博士は快く私を抱し入れてよまやま話をした後、シヨール・ペンハウアーの蔵書(その多くには彼の書きこみがある。彼は読んだ書物には、その書物と同じ国語で、例えばギリシア語の書物にはギリシア語で、書き

こみをした）、彼の著書の初版本、肖像画、彼の用いた椅子やナイトキャップ、フルート（彼は自分で演奏した）などを見せながら説明してくれた。

しばらくして別れを告げようとする私にヒュプシュナー博士は、日本でもショーペンハウアーに関する研究がもっと盛んになるように願っていると言いながら、自分の著書『ショーペンハウアーとその死』(Leben mit Schopenhauer)に百年祭記念展不去のカタログやこの文庫の解説書を添えて贈られ、固く私の手を握られた。空しく終るものとあきらめていたフランクフルト・アム・マインでの私のヘーゲル遍路を、間接ではあるがヘーゲルにつながる、思いもかけない収穫で飾ることができたのはうれしいことであった。

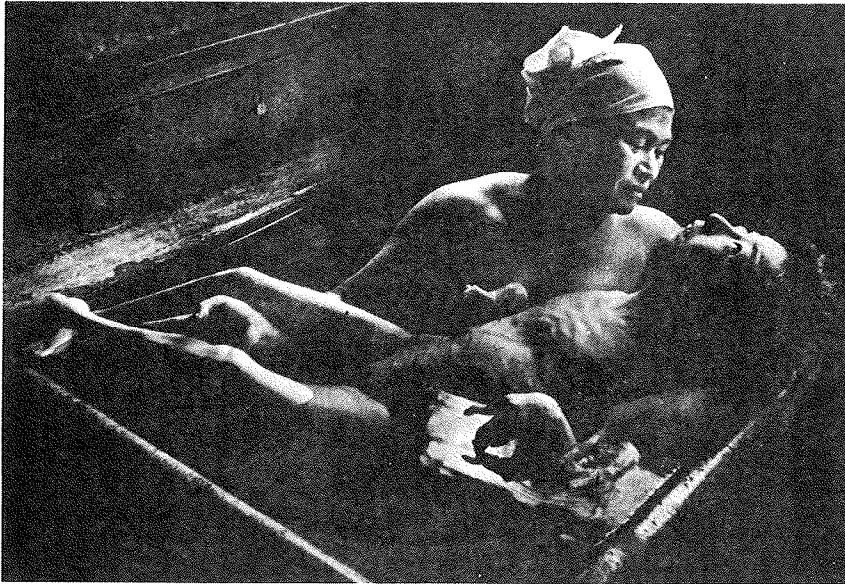
バンベルク

フランクフルトからはマイン河に沿って走る列車に身を托した私は、途中ヴェルツブルクで乗換え、三時間余りでバンベルクに着いた。戦火を蒙っていない静かな小都市である。町の名物の「ガールマン」という噴水の後にある「野ばら」という小さな宿屋に着いて、女中から「ダリウス・ゴット」と挨拶され、ここはもうバイエルンだと気がついた。

ヘーゲルは後で述べるように、ナポレオンの侵攻と占領によって大学が閉鎖され、それに個人的な事情もあって、イエーナにはいられなくなり、親友ニートハマーの口ききで一八〇七年にこの町に來て「バンベルガー・ツァイトウング」という新聞の編集に携わって、約一年間滞在した。ヘーゲルは決して読者と講壇の間を往復するだけの単なる学究的な哲学者ではなくて、政治的状况に深い関心を持ち、自分でもたくさんの政治論文を書いていることは周知のとおりである。そういう現実的な関心と知識とが無かったら、「法の哲学」のような書物は書けなかったであろうし、彼の哲学が今日でもあのように大きな影響を持つことはできなかったであろう。だから彼にとって新聞は思索の糧でもあった。「朝新聞を読むことは現実的な祈りである」とさえ語っている。こう考えると、バンベルク滞在は、短かかったけれども、ヘーゲルの思索生活にとって非常に重要な意味を持っていることになる。

(三三六)

(文学部教授
なかの・はじむ)



編集後記

今年度、書評委員会は四月の一八号に始まって、今ここに二五号を刊行するに至った。我々は来たる四八年度の刊行内容を、より一層充実したものにするために、四七年度をふりかえりこの間の書評活動について簡単に述べてみたい。

我々は書評活動というものを、
「状況の反映とも言える書物を斬ることによって、止むに止めぬ個体の主張というものを、常時、大衆的に掲載し、それを以って論争の場とする。即ち、変革と創造のパスを持統化、全体化させるための一方法として」「書評」誌という論争の場を設定する。」
という内容を基礎概念として出発した。

そしてその具体的課題として特に次の二点を挙げ、達成に努力してきた。

- 一、定期刊行化
 - 二、映画会、講演会、討論会等の設定
- では、この二点について個別的にどうであったか。まず、
- 一、定期刊行化について

これについては、多少発行期日のズレはあったが「定期月刊化」を達成することができた。

毎月、三五〇〇〜四〇〇〇部発行しているが、これらは発行後一週間程ですべてさばくことが可能となった。このことは「書評」誌が、マスコミ、ロコミ、実物一見等により、関西大学の学友段階における必読書であるという傾向が総体的に強まっているのであって、更なる継続発行の追撃に より、その傾向が既成概念化しつつあることを示している。そして、関西大学における、全く大衆的な意見発表の場として、また青臭い思索の場として、それが学友にとって唯一のものであるということからも、全組合員の確固たる信頼を得ているのである。

学友のこうし内に秘められた強固な支持を、より具体的ななものとする最低限のこととして、将来的には、定期刊行化に伴いつつ、発行部数の漸増をはかってゆきたい。

また「書評」誌及び、書評委員会における無意識の硬直化を防ぐために、学友の「書評」誌に対する反応を十分に汲みとるべきであり、我々は常に弾力的運動を展開していかなくてはならない。こうした中で、「書評」誌を「書評する」ということから、学友諸君にモニターとして、書評活動に対し自主的にとりくんでもらう方向がとられてきた。我々は常に、協同一致の精神で作業に従事していくことにより、物心両面の発展を克ち獲りたい。

- 二、映画会、講演会、討論会等の設定について

「書評」誌を補完しつつ、知的エネルギー（変革と創造のパス）の結集、発現の遂行を総合的なものにする（書評運動の内容を豊富にする）ために、映画会、講演会、討論会等を行なってきた。

一においても若干述べてきたが、書評運動の一環をなし、その内容を更に豊富にするものとして、即ち、論争の場を一層広範囲なものにするために、その一手段として設定したのである。現在の我々に可能なことは、このような大ざっぱな位置づけの下に、映画会、講演会そのものを設定するところまでであって、それ以上のもの——具体的に整理した個別課題を設定し、それに対して客観的に必要十分な見解を表明し、しかる後に映画内容、講演内容を決定するという方向——を提出することは非常に困難な作業であることが充分に思い知らされたのである。

これはひとえに我々の内部において、問題の整理が未だ不完全であり、あらゆる課題に対する問題意識が欠如していることからくるものであろう。逆に言えば「書評」誌の発行が惰性的なものにまよにならんとしているのでもあろう。我々は論争の場を論争の場たらしめるために、状況克服に関する命題から、全く同値関係を保つたものを問題提起として、常に鋭く送りこむべきである。惰性に陥る危険を克服するには、（我々の日常活動における進取、且つ地道な運動こそが、大きくは人類の未来永劫を保障する確実な基礎の一端となるという認識、態度を放棄することなく）我々自身が「学習」に励むことが第一である。

以上が四七年度活動の簡単なまとめである。このような反省の上になつて、四八年度を見晴かせば、内容の深化——論争軸、論争形態の確定ということが、まず最初に問われるだろう。そして、このことの内容については、四八年度初の二六号において充分に展開していくつもりである。